

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 《報告三》 森・里・海の共存から見える東日本大震災被災地の復興調査とこれからの展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 栄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001077">https://doi.org/10.57529/0002001077</a>

## 《報告三》 森・里・海の共存から見える東日本大震災被災地の

### 復興調査とこれからの展望

茂木 栄



こんにちは。國學院大學の茂木栄と申します。今回の報告では、森・里・海をつなぐという習俗が東日本太平洋沿岸に「浜下り<sup>お</sup>」という形で残っているという話と、東日本大震災、そしてその後の被災地の状況についての話を具体的に報告します。さらに、グローバルとローカルを結ぶということがこのシンポジウムの主題だと思われるので、その話についても触れていきたいと思えます。

#### 日本の共同体について

まず、今日の報告のポイントとして、日本の共同体についてどのような点が注目されるのか、という点を挙げておきたいと思えます。

一つは、日本の共同体の空間構造についてです。つまり、森（社<sup>ぶ</sup>）と里という関係

です。日本人は長らくその空間構造の中で生活してきましたが、これに対して戦後大変な逆風が吹きます。たとえば、大塚久雄さんが『共同体の基礎理論…経済史総論講義案』（岩波書店、昭和三十年（一九五五））という、戦後文化史の代表格といえる著書を刊行します。同書では、日本の共同体は封建社会の残滓であり、解体されるべきものだというふうに着目されていて、共同体の解体は「私の学問の最大の目的だ」とまで序文に書いてあります。

それに対して、内山節さんは、大塚さんの『共同体の基礎理論』と同じタイトルに「自然と人間の基層から」という副題をつける形で、『共同体の基礎理論…自然と人間の基層から』（農山漁村文化協会、平成二十二年（二〇一〇））を出版されました。同書では、真つ向から大塚さんに反対論を唱えるということで、反響も大きく今でも内山さんは頻繁に講演に呼ばれています。

戦後の日本政府においては、日本経済をどう復活させるか、そして一億の日本人をどう養っていくかということが大きな課題になりました。結果として重厚長大産業を大きく広げていくことによって経済を復活させるという政策をとったことは皆さんの共通理解だというふうに思います。

そこで出てきた問題が公害だったわけです。しかしながら、公害問題が顕在化するまでは、日本国民は公害に対して問題意識を持っていませんでした。三重県四日市市では「煙たなびく四日市」と、コンビナートに煙が立ち込める様子を讚美して歌っているものがあります。四日市市立塩浜小学校の校歌では、「港のほとり並びたつ 科学の誇る工場は 平和をまもる 日本の 希望の希望の光です」と歌われていました。

このように、当時公害は深刻には捉えられていませんでした。ちょうど、池田勇人が昭和三十五年（一九六〇）に内閣総理大臣に就任し、所得倍增計画を打ち出した頃です。この計画を打ち出すのと同時に高度経済成長が始まるわけです。この高度経済成長の影の部分として公害問題が顕在化していきます。しかし、国は一億の日本人を養うため

に公害問題が顕在化して大きな社会運動になるのを抑え込むという政策をとりました。

高度経済成長の時代は、経済が成長していくことによって生活が楽になり、暮らしが豊かになるという幻想を持った時代だったのですが、ふと気がつくとき多くの人が咳込み、苦しみ、そして死んでいくという時代になっていました。しかも四日市だけではなくて、教科書などに掲載されているように熊本県不知火海沿岸の水俣病や、静岡県田子の浦港の廃液ヘドロ問題、富山県神通川流域のイタイイタイ病、新潟県阿賀野川流域の第二水俣病などの様々な被害が明らかになり、多くの犠牲者が出ていることが顕在化しました。

この公害問題に対して自治体の行政は結局企業の擁護に回って、被害を受けているこうした村々の人々を本気で救ってくれることはありませんでした。革新系の政治団体も同様です。四日市の場合には、磯津いそづという集落が最も被害を受けました。磯津はちょうど鈴鹿川の突端にある漁村で、村人は風が吹くと喘息を起こすという四日市喘息の症状が出ていました。最初のうちはコンビナートの労働者が支援してくれましたが、結局、会社と村人の間で本格的な闘いになったときには、雇用主である会社に背いてまで支援するということはありませんでした。その結果、支援者はどんどん離れ、最終的に闘い抜いたのは磯津の集落にある氏神の塩崎神社に伝わる鯨船行事という神事の祭組織の人たちでした。

この祭組織の人たちが公害訴訟を闘い抜いて勝訴したことによって、大気汚染防止法や公害防止法などの法律が制定され、そして環境庁ができ、国の産業政策は経済成長の時代から福祉の時代へと転換していくことになりました。国を大きく変えたのは、公害に苦しんでいた各地の小さな村々の住人達だったということです。こうした公害問題の解決に対し、大きな影響力を持ったのがムラの祭組織の人たちだったということは日本の特徴だと思えます。

次に環境問題に取り組み理論をまとめて述べてみたいと思います。

現在は、「持続可能な社会」という言い方でよく取り上げられています。古沢先生も先ほどの報告で、手詰まり感はどうしても拭えない、あるいはすでに手詰まりになっているということをご指摘なさいました。

また、先ほど述べた内山節さんは、先程ご紹介しました『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』において、共同体の再評価として、「自然と人間の関係を問いなおそうとする思想」や「近代以降の自然と人間の関係のゆがみを問いなおそうという発想」があり、「川と人との関係をとらえ直すことによって、川とは何か、河川と流域住民の関係はどうあるべきかを再創造しようとした大熊孝の仕事や、環境自然保護問題をその地域の自然と人間の関係から解こうとした鬼頭秀一の提起は、その代表的なものである」と指摘されています。

さらに、内山さんは全国で展開されている「里山と人間の関係をとらえ直すところから始まった里山整備の活動」や「土と人間の関係を問いなおした有機農業の広がり」について、「このような展開が日本では共同体の再評価をも提起していくことになる」と述べています。日本の村落共同体は、神社（もり）の存在を前提として成り立っています。次の言葉も内山さんの言葉です。「自然と人間の関係をかつて支えていた共同体の役割を学ぶことが、未来に向かつて重要な事柄だと気づかされる」。こうした内山さんの言葉を受けて、私は「共同体の絆を支えていたのは神社・社、すなわち鎮守の社もりである。鎮守の社は単独に存在しているのではなく、自然風土のなかの大きなモリ（山）から小さなモリ（お旅所の榊）までの天と地を結ぶ神の道が共同体の中心軸を形成し、氏子の暮らしと命の安定を支えている」と整理したいと思います。大きなモリというのは山のことですね。小さなモリというのは鎮守の社のさらに下にある、お神輿が渡御していく場所、つまりお旅所のことで、たとえ建物がなくても榊一本を立ててモリとしてあります。東日本大震災では、こういう共同体の空間構造を持つ東日本太平洋沿岸の村々が大津波の被害を受けたわけです。

## 浜下り——山と海をつなぐ祭礼

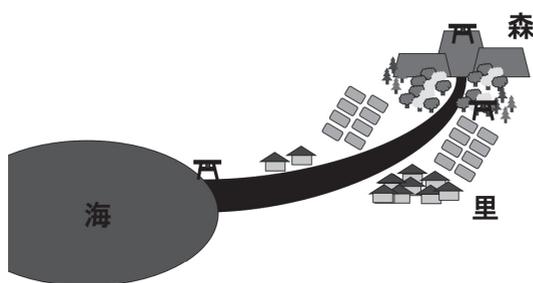
岩手県南部から宮城県、福島県、茨城県、千葉県太平洋沿岸の地域では、顕著な形で山と浜とを結ぶ習俗・お祭があります。それが「浜下り」というお祭です。以前、「山・社・海をつなぐ神の道」(國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学 文化・社会の多様性』弘文堂、平成二十四年(二〇一二) という論考にも示したのですが、宮城県、福島県の太平洋沿岸では、中断しているものも含めて大体一七〇件近くの浜下り神事とそれに類する行事が行なわれています。実は、「共存学」プロジェクトが始まったときに、宮城県気仙沼と、その気仙沼の山あての神山になっている室根山(岩手県)という山の特別大祭の調査を実施しようという計画がありました。そのプロジェクトが始まる直前に、四年に一度のお祭の調査を計画しており、「さあ、行こうか」と出かけようとした矢先の平成二十三年(二〇一一)三月十一日、東日本大震災が起こり、気仙沼の海の方(山の方との対比構造あり)が津波被害にあったことから、結局きちんとした形でのお祭の調査はできませんでした。そうした経緯がありました。大震災の被災地における神社やお祭の役割を見ていこうという一つの視点が共存学において生まれたわけです。

そこで、気仙沼を一つの拠点としてプロジェクトを始めました。私はこれまで被災地では、古沢先生と行動を共に調査してきました。プロジェクトを開始した頃は、地域の民俗芸能が被災した人たちの大きな力になるということがわかったものですから、震災から一年を迎えるときに大きなイベントの開催を提案しました。岩手県の大船渡市・陸前高田市・住田町の三地域を「気仙」と言うのですけれども、この気仙の人たちが「ケセンきらめき大学」という市民大学を開いています。このケセンきらめき大学の関係者の方々と共同して岩手県大船渡市のリアスホールをお借りして、平成二十四年(二〇一二)二月二十五日・二十六日にイベントを開催することができました。初日は、『ケセ

ン鎮魂のための地域伝統芸能大会』が行われ、二日目午後からは国際シンポジウム『災害と郷土芸能』が開催されました。

このイベントは大変好評だったということもあって、気仙地域の伝統文化・民俗文化を掘り起こして地域を活性化させようではないかという話になりました。そこで、文化庁の地域活性化事業による助成資金を頂いて、平成二十六年（二〇一四）、二十七年（二〇一五）に信仰や生業の記録活動を行いました。また、「文化遺産総合活用推進事業」の「地域文化遺産活性化補助事業」として、住田町教育委員会内に事務局を置き、住田町農政課、気仙伝統文化活性化委員会（委員長…一般社団法人ケセンきらめき大学学長）の実施体制のもと、平成二十九年（二〇一七）からの六年間、地元の人たちと連携することとなりました。たとえば、「けせん文化遺産情報発信ウェブサイト構築事業」や「文化財ガイド養成事業」、「けせんのたから2017 気仙民俗芸能祭」などの事業です（文化庁「平成二十九年（二〇一七）度文化遺産総合活用推進事業（地域文化遺産活性化事業）実施計画一覧」）。大勢の地元の人たちが文化財グループというのをつくり、積極的に活動してくださったので、私は見学したりアドバイスをしたりしてこのプロジェクトに参加しました。

気仙の他には、大槌町でも大槌町文化遺産活性化実行委員会を組織し、文化庁の「大槌町郷土芸能活性化事業」の助成を受けてプロジェクトを立ち上げました。大槌町文化遺産活性化実行委員会主催、大槌町教育委員会及び大槌町郷土芸能保存団体連合会共催で、「大槌町郷土芸能祭」を平成二十八年（二〇一六）十二月十一日に大槌町城山公園体育館で開催しました。大槌町は非常にいろいろな種類の芸能が残っている地域でしたので、その実態を把握するために大槌町文化遺産活性化実行委員会で平成二十五年（二〇一三）から二十七年（二〇一五）の三カ年にわたって悉皆的な民俗芸能調査を行いました。この調査では、大槌町内の芸能団体二十一団体のうち現在活動中の十九団



【図1】山と海をつなぐ概念図

体の由来や歴史、演目、構成、衣装、道具などについて調査を実施し、平成二十八年（二〇一六）にこの調査の結果を『大槌町の民俗芸能―大槌町民俗芸能調査報告書―』（大槌町教育委員会、平成二十八年）として刊行しました。これは、共存学の研究事業と一緒に行ったものです。ですから、共存学としても気仙・気仙沼・仙台平野には随分通ったわけです。

次に、先ほども少し触れた山・森・海を結ぶお祭として代表的な東北地方太平洋沿岸の浜下り神事についてお話しします。浜下りは、福島県では川ごとに伝承されているといってよいほど、多くの地域で確認できる神事です。浜下りは、毎年行なう地域もあれば、式年で七年に一回、八年に一回、十二年に一回行なう地域もあります。長いものになると七十二年に一度大祭礼を行なう西金砂神社・東金砂神社の磯出大祭礼（茨城県常陸太田市・日立市）があります。これらの神事は川の中流域から浜まで神輿を渡御してくるとい形式をとっています。つまり、【図1】のように山と浜をつないでいるわけです。様々な研究者が浜下りについて論考を著わしています。

さて、東日本大震災の津波の到達点を地図上に落としてみたところ、浜下りを行う地点で浜にあたる地域はほとんど津波が到達しています。しかしながら、神様が渡ってくるスタート地点である山の方は全く無傷でした。それから、福島県立博物館が出している学術調査報告書『福島県における浜下りの研究』（福島県立博物館、平成九年（一九九七））には興味深い図が掲載されています。「古代における文化の通路」という地図で、縄文遺跡、弥生遺跡、そしてハヤマの場所がドットされている

ます。これを見て、東日本大震災の津波到達点を報告書の地図に入れてみました。そうすると、縄文遺跡はすれすれのところまで津波が来ていますが、一つも到達点に重なっていないことがわかりました。同じように弥生遺跡があった場所もすれすれのところで津波が止まっています。

なお、縄文遺跡は海岸近くだけではなくて、主に内陸の方に分布しています。ただし、海岸に近いところでも、津波は到達していません。そのすぐ近くのところで津波は止まっていたのです。ちょうど縄文遺跡の分布と浜下りが行われる場所の分布を重ねていくと、内陸の縄文遺跡のある場所が浜下りの出発点の神社がある場所の近くに分布していることがわかりました。そして、その背後にハヤマが並んでいるという地形的な特徴が地図を加工してわかってきたのです。

また、広い地域で現在も非常に盛んに行なわれている鹿踊しかむりという芸能があります。この鹿踊は、「三一一復興支援無形文化遺産情報ネットワーク 文化遺産アーカイブス」(<http://mukei311.tobunken.go.jp/index.php?gid=10115>、東京文化財研究所 無形文化財遺産部)によりますと、宮城県、岩手県、福島県のなかで無形文化遺産の民俗芸能として八四件が現在登録されています。このシシとはシカのことを指します。この鹿踊は山と海をつなぐ芸能であるということがわかりました。鹿踊はかなり古い時代のアマ族との関連が指摘できます。現在行なわれている鹿踊が古いという意味ではありません。伝承されている要素のなかにアマ族と結びついて広がっているものがあるということです。ここでは、山と海を結ぶ芸能の要素として「シシ」「シカ」ということがポイントとして出てきます。

この鹿踊の継承活動に注目して、文化庁の「平成二十八年度(二〇一六)文化遺産を活かした地域活性化事業」として芸術振興費補助金を受けました。気仙伝統文化活性化委員会主催で住田町、同町教育委員会、同町郷土芸能団体連絡協議会が共催し、「けせんのためから2016気仙民俗芸能祭」を開催しました。同祭では、鹿踊の継承活動に関

する座談会も行なわれています。

### 集落形成の風土モデル——森・里・海

日本の集落の特徴として集落の背後の山に山宮を置き、里から街道にちよっと入ったところに里宮を置き、そしてお祭のときに田んぼの中に仮宮である田宮を置くという構造があります。つまり、山宮・里宮・田宮という天と地を結ぶ縦軸の構造のなかに横軸の街道が通るといいう空間構造をとっているのが日本の共同体の空間構造だといわけです。

これは、ご承知のようにヨーロッパの広場集落とは全く異なる構造をとっているものです。

こうした構造が基本形としてあるのですが、浜下りをする神社の名称を見てみると、中斷された祭も含めて全部で大体一七〇社ほどありまして、複数の名称を確認できる神社として、「熊野神社」が七社ほどあります。また、「日吉神社」が四社あり、大きな浜下りは日吉神社が関わっています。それから、「諏訪神社」が一四社ございまして、「鹿島神社」が八社確認できます。

次に、複数の社名が確認できる神社の本宮の空間構造をみていきましょう。熊野本宮の場合は補陀落山寺ふだらくがありまして、諏訪大社の場合は諏訪湖と諏訪の下社・上社そして山の上の御射山みきやまと、やはり山宮・里宮・田宮の形をとって、最後は湖や海があります。そして、日吉神社の場合も比叡山ひえいがあつて日吉大社があり、琵琶湖があるという形で、海と山を結ぶ空間構造をもったお祭になっています。この辺りの風土モデルを見ると、熊野は本宮（熊野本宮大社）、那智（熊野那智大社）、速玉（熊野速玉大社）と三社あり、さらにその先に補陀落山寺があつて補陀落渡海の習俗が残っていたわけですから、こういう空間構造は熊野モデルの風土ということができます。日吉神社の場合は、琵琶

琵琶湖と神社の空間構造から日吉モデルといえます。同じように、上社下社と諏訪湖からなる諏訪大社の場合は、諏訪モデルといえます。鹿島神社の場合は、鹿踊と若干関係がありまして、元々鹿踊は鹿島の鹿踊がこちらの方に入ってきたという伝承があります。

こうした事例を見ていくと、山から海へ下りるといふ浜下りの伝承、祭の形というのは、文化的には幾つかのモデルがあるということが指摘できます。

話を元に戻しますと、被災地は元々浜下りに見られるような形で山と浜がつながっていました。しかし、福島県の場合にはご存知のように原子力発電所の事故がありましたから、多くの地域でほとんど浜側へ入ることができない状態が続いていました。ですから、山から浜の方に助けに行くとか、援助するとかいうことはできなかったようです。一方、宮城県ではこの関係が非常に生きておりました。初期の段階では山方から浜方の方に救助が行ったという話を聞いています。一般的に食料のことでいえば、浜の方はおかずが豊富、山の方はお米が獲れましたので、浜と山で婚姻関係を結んで、おかずとお米を交換するという親戚関係も多く見られ、それが震災のときにも生きていたのです。

### 高台移転と共同体——移転元地への回帰

そろそろ結論に入りたいと思います。皆さんの中にも被災地に何度か足を運ばれている方も多いと思いますが、震災からもう少しで九年経つ現在でも、なかなか復興が進んでいないのが現実です。進んでいるように見えても、そこに暮らす人たちが希望を持って生活をしている感じが全くしない地域もあります。

こうした中で東松島市の月浜という漁村は、明るい雰囲気を持っている集落です。ここは、自分たちで裏山を切り開いて住宅地を造り、そこに月浜の集落を全部移したのです。集団移転を自分たちで進めた集落ということですが、月

浜の集落の跡地は空き地にすることなく、漁業の加工工場を建設して利用しています。月浜では、平成二十三年（二〇一一）の不安な状況下で、七月八日に当地の海苔生産者で共同生産組織である「奥松島海苔生産グループ月光」を設立し、「月光プロジェクト」を始めました。このプロジェクトでは海苔の養殖の復活が計られました。これが大当たりすることになり、今や元の集落のあった場所には工場が三棟建て、元の集落と新しい集落の間にある大きな駐車場だった場所に製造工場を建てて栄えています。

つい最近も小正月の「えんずのわり」という行事が行われるというので見学に行きました。そのとき月浜の皆さんはとても明るい表情をしていました。海苔の養殖と製造を細々やっていたかつての生活とは全く違って、今や大きな産業となり大成功しています。

移転集落で月浜のように成功をしているところは少ないでしょう。結局、行政の主導で強制的に住民がバラバラにされて高台移転をしている場所が多いのです。そうすると、昭和八年（一九三三）の津波のときのように、高台に集団移転しても、最終的に元の集落のあった場所に戻ってしまうことになるのではないかと思います。

実際には、高台移転をしたのに元の場所に戻ることが非難される場合もありましたが、こうした事例について、山口弥一郎さんは、『津波常習地三陸海岸地域の集落移動』（山口弥一郎選集 第六巻 日本固有生活を求めて『世界文庫、昭和四十七年（一九七二）』のなかで、「自然的条件のもと、経済的、心理的、民族的なものと混在するのを特徴とする」としながら次の五つの問題点をあげています。それは、1、「集団復帰要因の複雑」、2、「津浪襲来の頻度」、3、「現地復帰の機会」、4、「集落の発達と原地復帰」、5、「原屋敷に対する民俗心理」の五つなのですが、最終的に土地に戻るの「習性」だといっています。つまり、高台移転をさせたのに下りてきてしまう行為を非難するのはちょっと酷なのではないかと指摘しているわけです。

やはり、日本人の場合には共同体のなかでの生活が暮らしの基本であるため、それを解体してしまって、勝手に一人ひとり生きていけというのは、あまりにも酷いのではないかと感じています。

それと、三陸復興国立公園の活動とみちのく潮風トレイルがどう結びついていくのかという点も確認していきたいところです。共存学のプロジェクトにおいても繰り返し調査見学したのですが、なかなかビジョンが見えてきませんでした。また、集落の再生とこうした国立公園潮風トレイルをきっかけに外から呼び込む観光客との関係性も見えてこないのです。ちゃんとしたビジョンがあつて始めたことだろうと思えますけれども、九年も経つ今でも復興はまだまだ遠いという現状もあるわけです。

これまでの三陸津波の場合は、三年経つと元の集落に戻つたといえます。明治三陸地震（明治二十九年（一八九六）六月十五日）のときも、昭和三陸地震（昭和八年（一九三三）三月三日）のときもそうでした。だから、今回は非常に規制が多くて、復興が遅れているのではないかと思うわけです。ただ、規制をしたことよって素晴らしい地域社会に生まれ変わったというふうには今後、言われるのかどうか。それがたとえば十年経って「よくなりましたね」と言えるのかどうか。月浜の例は特殊な例です。要するに、共同体の力を結集した結果、月浜という素晴らしい成功を生んでいるわけです。そんなにたくさん成功例があるわけではないというのが現状となります。

以上、私の方からは、東日本大震災被災地の復興調査とこれからの展望について報告させて頂きました。ありがとうございます。